

鳥の博物館の展示上の課題と改善案

1. 手賀沼の鳥

	展示上の課題	改善の方向性
1-1	○1980年代後半の鳥類相をもとにして構成されているので、現在の鳥類相との乖離が生じている。 例えば1980年代後半に見られていたハシビロガモやコアジサシは現在ほとんど見られず、現在ではカワウ、カンムリカイツブリ、コブハクチョウなどが普通種となっている。	○最新の鳥類相の知見を基にして、標本の差替えを行う。 ○1980年代からの変遷についての解説も検討する。
1-2	○手賀沼の環境に関する情報も最新のものではなくなっている。	○今後も最新の情報に更新し続ける必要があることから、デジタル的な表示による手法に更新する。
1-3	○冬の手賀沼のジオラマのケースはガラスによる仕切りがないため埃がたまりやすく、天井の電球の交換がやりにくい構造になっている。	○ジオラマの位置・サイズ・形状等について、クリーニングやメンテナンスの容易性も考慮に入れて検討する。

2. 日本の鳥

	展示上の課題	改善の方向性
2-1	○鳥の博物館の全体として、日本産鳥類の多様性やその成立要因に関する展示がない。 ※現在は定期的に「日本の鳥」を企画展または特別展示として行う事で市民のニーズに応じている。	○日本産鳥類に関する展示を新設する。場所は、多目的ホールの壁面または現在の企画展示室を用いた収蔵型展示としたい。日本産鳥類の多様性、分布の特徴、日本列島の地理的な特徴が鳥の種分化に与えた影響などを紹介する。

3. 鳥の起源と進化

	展示上の課題	改善の方向性
3-1	<p>○1980年代後半時点の科学的知見を中心に構成されており、情報が一部古くなっており、また、始祖鳥中心の展示に偏っている。</p> <p>※系統樹等は最新の情報への更新が行われている。</p>	<p>○獣脚類・中華竜鳥・中生代の鳥などの新しく見つかった化石資料のレプリカや研究成果の紹介を追加する。</p> <p>○脊椎動物全体から恐竜・鳥類までの系統樹を示し、恐竜と鳥の共通点（恐竜とスズメの巨大骨格標本を対比させるような展示など）や、恐竜から鳥へと進化した過程でどのような体の変異が起こったのかを解説する。</p>
3-2	<p>○人類史以前の絶滅と、人間活動による絶滅が同列に扱われていてわかりにくい。</p>	<p>○モアやドードーなどは時代や背景が異なるため鳥の保全コーナーに移動して同コーナーを拡充する。(⇒5)</p>

4. 世界の鳥

	展示上の課題	改善の方向性
4-1	<p>○館全体として鳥の行動・生態に関する展示や研究内容の紹介が乏しい。</p>	<p>○館全体で最大の展示室であるこの展示コーナーで充実を図ることを検討する。</p> <p>具体的には、展示室の中央スペースに展示ケースその他の展示機能を増設し、鳥類の生態（渡り・繁殖等の生活史）、形態、生理等について解説する。現在「起源と進化」「足と嘴の形態」及び「飛翔」コーナーで展示している内容は、一部をここに移動させ、鳥の実際の生活と形態が、どのように関連しているかを紹介する。</p>
4-2	<p>○標本の一部が古く、更新が望まれる。</p>	<p>○より新しくその種の特徴を持つ標本に差し替える。</p>
4-3	<p>○分類の細分化に伴い科の数が増えたことへの対応</p>	<p>○全ての目についての解説に変更する。</p>

5. 鳥の保全

	展示上の課題	改善の方向性
5-1	○館のテーマとして「人と鳥の共存を目指して」と掲げているが、それに対し鳥の保全に関する展示の量が少ない。	○現在は部屋の一角を占めるのみだが部屋全体にコーナーを拡張し、内容的にもアップデートを図る。 ⇒飛翔コーナーの機能は世界の鳥コーナーに移す。
5-2	○生物多様性を軸とした今日的な価値観と比較すると陳腐なものになっており、特に「なぜ鳥類を保全するのか」の理由が、来館者の感情に呼びかけるものになっている点は改善が必要。	○人と鳥との関係の歴史を概観し、古代から現在までに人が絶滅させてきた鳥類とその減少の原因について整理して紹介し（乱獲、生息地の破壊、外来種の導入、遺伝的汚染、漁業混獲など）、代表的な各種の保全の取り組みについて紹介する（トキ、アホウドリ、ヤンバルクイナなど）。また、古代からの文化と鳥類の関わりについても展示する。 ○なぜ生物多様性（鳥類を含む）の保全が必要なのかについて、私たち人間の生活を守り、豊かにしていくためという観点から理性的に解説する。